

# ブダペスト通信

盛田 常夫



2024年 NO.1

小林陵侑、貫禄のジャンプ週間タイトル獲得



2024年1月7日

2023/24 年のスキージャンプ週間で、小林陵侑が 3 度目の総合優勝を飾った。現役選手としてはポーランドのストックと並び、歴代 3 位の優勝回数となった。これから円熟期を迎える小林には、歴代記録の更新が期待される。ドイツのヴェリゲル選手は 2001/2002 年のハナヴァルド選手以来のドイツ選手のジャンプ週間優勝が期待されたが、最終戦で小林に突き放された。ジャンプ週間 3 戦 6 本のジャンプを終えて、わずか 4.8 ポイント差（およそ 3m の差）で肉薄していたが、最終代戦 1 本目で 14 ポイントの差を付けられ、ドイツの夢は打ち砕かれた（最終的に 24.5 ポイント差）。また、オーストリアのクラフト選手も W 杯初戦から 4 連勝する好調を維持してジャンプ週間に入ったが、緒戦から第 3 戦まで小林の後塵を拝し、念願の 2 度目の優勝を果たすことができなかった。

小林は 4 戦すべてを 2 位で終え、一度もトーナメント優勝しないままジャンプ週間総合優勝を飾った（2018/19 シーズンでは 4 戦すべてに優勝し、史上 3 人目のグランドスラムを達成）。W 杯ポイントでは 2 位に 80 点が与えられるから、ジャンプ週間だけで 320 ポイントを稼いだことになる。これに加え、ジャンプ週間優勝者には 10 万スイスフランの賞金が付く。W 杯総合ポイントは 3 位に上昇し、第 4 戦の予選首位賞金 3000 スイスフランを加え、ここまでの獲得賞金はおおよそ 18 万スイスフランで、賞金ランキングトップに躍り出た。

## W 杯とジャンプ週間

スキージャンプ W 杯は 11 月末から翌年 3 月までの 4 か月にわたって繰り広げられる。欧州の選手と違い、日本人選手は家に帰ることなく、4 か月にわたる転戦が続く（札幌大会で一息つけるが）。今年の男子 W 杯では個人戦が 32 戦行われる。このうち、第 9 戦から第 12 戦の 4 戦が、ドイツとオーストリアのジャンプ台を回る伝統のジャンプ週間に設定されている。今年で 72 年目を迎えた歴史あるジャンプ大会である。年末年始のトーナメントとして人気があり、各会場は数万の観客で埋まる。数百人程度の観客しか集まらない大倉山大会とは大違いである。

W 杯は通常、金曜日に予選を行い、本選出場者 50 名を決定する。土曜日に本選 1 回目で上位 30 名が絞られ、この選手たちが 2 回目に出場できる。ふつうの W 杯では日曜日にも同じ会場で、午前に予選を行い、午後には本選を行うことが多い。W 杯ポイントは 2 回目に出場した 30 名の選手のみと与えられる。1 位が 100 点、30 位は 1 点で、上位に食い込まないと、ポイントを稼げない仕組みになっている。総得点で

シーズンのW杯のチャンピオンが決まり、ポイント数にポイント賞金を掛けたものが、シーズン獲得賞金になる。

伝統のジャンプ週間は10日間に、ドイツとオーストリアのジャンプ台4か所を回って競う。短期間のうちに競技が行われるので、いったん無双状態になると、他の選手が入り込む余地がなくなる。ただ、各ジャンプ台は形状が異なり、アプローチの長さや、最後の飛び出しのスロープの長さや角度が微妙に違う。10分の1秒のタイミングで決まる競技だから、ジャンプ台の形状の違いは結構厄介である。さらに、風の影響がある。とくにインスブルックは街の高台に設置された競技場で、山からの風が不規則に吹いている。どの選手にとっても、インスブルックのジャンプが鬼門になっている。

4会場計8本のジャンプの素点を加算して、ジャンプ週間のチャンピオンを決める。1本でも失敗ジャンプがあると、チャンピオンにはなれない。昨年、ディフェンディング・チャンピオンだった小林はインスブルック大会で上位30名に入れず、その時点でジャンプ週間の挑戦は終わった。今年のディフェンディング・チャンピオンであるグラネルード（ノルウェイ）は、ジャンプ週間緒戦と第2戦で決勝2本目に進めず、早々と脱落した。

## 今年のW杯

今シーズンのW杯は初戦から第4戦までクラフト（オーストリア）が連勝し、小林の調子は悪いわけではないが、なかなか上位に食い込めなかった。これではジャンプ週間もクラフトの独壇場になるのではないかと予想されたが、ドイツの選手やスロヴェニアの選手が健闘し、クラフトの連勝記録が止まった。そういう状況の中でジャンプ週間が始まった。

今年はドイツの選手やオーストリアの選手の開幕ダッシュで、昨年と様相が変わった。

スキージャンプは不思議な競技で、調子の良い選手が連戦連勝する傾向がある。昨シーズンはグラネルードとクヴァツキー（ポーランド）の調子がよく、この二人が交互に優勝を分け合っていた。ところが、クヴァツキー夫人に心臓病が発覚して、クヴァツキー選手はいったんポーランドに戻ったこともあって、後半戦の成績は落ちた。心痛が重なったのか、今シーズンは練習不足で今シーズンは下位に低迷して

いる。昨シーズンは大ジャンプを披露していたグラネルドも調子を落としている。毎年、高い水準の状態を維持するのが難しい競技である。

一昨年のシーズンでは小林が種々のタイトルを総なめにしたが、昨シーズンはトレーニング不足のために、ジャンプ週間を終えて、札幌大会を迎えるまで散々な成績だった。そこから調子を取り戻し、最終的にW杯総合 5 位で終えたのはさすがである。今年は昨年の轍を踏まないように、プロ転向の背水の陣を敷き、トレーニングを重ねてきた。

小林選手の今シーズンはまだトーナメント優勝がない。W杯優勝は 30 勝で足踏みしている。これから後半戦を迎えるW杯で、優勝回数を増やし、スキージャンプの歴史に名を残してほしい。

## 日本選手の状況

小林選手を除けば、日本のジャンプ陣は長期低迷期にある。これはジャンプ人口が影響している。ドイツやオーストリアは歴史的にジャンプ人口が多い。スロヴェニアもスキージャンプは国技のようになっている。ポーランドはジャンプ新興国だが、ジャンプ台が新設され、ジャンプ人口は多い。ノルウェイは男女とも選手を揃えているが、なかなか有力なスポンサーが見つからないためか、今年は男女とも低迷している。歴代の名選手を輩出してきたフィンランドは選手層が薄く、日本と同様に、長期低迷状態にある。

スキージャンプは誰もが簡単にできる競技でないので、どの国も選手層の薄さに苦しんでいる。小林に次ぐ日本選手は、昨年からW杯に参戦している二階堂漣である。まだ 22 歳と若く、今年のジャンプ週間では 12 位に入り、W杯総合得点でも 20 位に付けている。今後の成長株として期待される。この他の日本人選手は予選落ちするか、本戦に出場できても 1 回目ですぐに落とされている。これでは団体競技が組めない。

もっとも、国際連盟もスキージャンプ人口の少なさを考慮して、2名による団体競技や、男子2名女子2名の混合競技を導入し始めた。2名ずつなら試合になるという判断である。

幸い日本の女子選手は上位 30 名に 4 名の選手を抱えており、男子より団体競技を組むのが容易である。また、小林、二階堂、伊藤有希、高梨沙羅の組み合わせは、メダルを狙える選手構成である。

## スポンサーの問題

ドイツやオーストリアを除き、各国スキー連盟はスポンサー獲得に苦しんでいる。とくにスキージャンプはドイツの会社が主要なスポンサーになっており、ドイツ選手の活躍がないとスポンサーが離れていく。その意味で、今年のW杯は理想的に進行している。

小林選手やグラネールド選手が勝ちまくり、ドイツ選手が低迷しては、世界のスキージャンプ競技を支える資金が先細っていく。その意味で、今年のジャンプ週間で、ヴェリンゲル選手が小林選手に肉薄し、大会が盛り上がった。また、ジャンプ週間最後の会場ビショフスホーフェンは多数のオーストリア選手を輩出している村だから、小林選手が第 4 戦の優勝をさらわなくてよかった。クラフト選手がトーナメント優勝したことで、会場が大いに盛り上がった。小林選手が歴史に残る大活躍をしても、日本の企業はスキージャンプ大会に協賛することはない。だから、小林選手が一人勝ちするのは競技の発展から考えると好ましくない。

今年のジャンプ週間のように、会場ごとに優勝者が異なると、大会が盛り上がる。小林選手は 4 会場すべてで 2 位となり、20018/19 大会のようにすべての優勝と賞金を総なめにする事なく、総合優勝を飾った。世界のスキージャンプ競技の発展のために理想的な展開となった。それにしても、もう 1-2 名の日本人男子選手に活躍して欲しいものだ。